

編集後記

本号のテーマは「消化管疾患の新しい診断法」である。新しいという言葉は平凡な言葉ではあるが、いつきいても魅力に満ちている。新しい方法だけにまだまだ検討の余地も多く、沢山の問題点をかかえていることはいまでもないが、こういう特集号がいつでもなりたつのが「胃と腸」の若さであろう。

今月号は消化管疾患の新しい診断法のなかでも、最近驚異的な成長と普及をとげつつある色素剤を応用した消化管内視鏡検査法が中心的主題である。

色素剤を応用した内視鏡検査とはたいへん長い名称で、もう少しうまい名前はないものかと考えているところである。これまでの色素撒布法、色素着色法とか内視鏡的コンゴーレド法などを総括した名前として「色素内視鏡検査」とでも呼びたいところであるが、もう少し時間がいるだろう。

胃癌組織への色素の着色現象と腸上皮化生粘膜への色素の uptake とは同一に考えられないことはすでにわかっているので、われわれも生体染色法という言葉をはかえているわけであるが、この方法を大きく前進させるには物理化学など内視鏡専門家以外の強力な援護が必要であろう

本号ではX線検査法の進歩は座談会の形でとりあげられた。幸い白壁教授のたいへん要領をえた司会のおかげで、消化管X線診断の動向はもれなくピックアップされ整理されたものと考えている。消化器系三学会の合同秋季大会の日も迫ってきた。読者諸先生の御健闘をせつに祈る次第である。

＜竹本 忠良＞

＜編集＞ 早期胃癌研究会